

いきいきOT大作戦

～作業バランスってなんだろう？～

施設名：介護老人保健施設 アルカディア

発表者：比嘉優生斗

又吉友希 石田晋也

浜川良子 富原唯

【はじめに】

私達の生活は様々な作業の上で成り立っている。老年期に入ると、身体的・社会的変化から生活の中での作業数が減少傾向にあり、作業バランスが崩れている方が見られる。作業バランスが崩れると、何もしない、何も感じない無為とよばれる時間を多く過ごす事になり、認知症の発症や症状悪化に繋がってしまう事がある。その結果、目が離せなくなり、職員の付き添いが必要になる事が多く見られる。

当施設ではそのような入所利用者に対して、作業療法士（以下OT）が中心となって作業療法の提供を行ってきた。しかし、OTは若手から中堅まで知識や経験の差があり、提供できる内容に差が生まれている現状があった。

今回、OTが行ってきた取り組みを通して、利用者・職員に変化や気づきが見られたので報告する。

【実施内容】

●対象：認知症利用者
リアリティオリエンテーションを中心とした
・季節感のある手工芸や工作
・認知機能訓練（パズル、計算問題、塗り絵）

●対象：OT
週1回、業務開始15分程度の情報共有を目的としたOTミーティング
・フロアごとの作業活動の差を少なくし、フォローしやすい体制作り
・アイディアの共有
・利用者の作業難易度の確認
・作品の展示方法について
など

【実施後の変化点】

●利用者
・「私にもこんな事が出来るんだ」と声があった
・小集団での取り組みにより、利用者間の交

流が見られるようになった

・頻尿の利用者のトイレ訴えや回数が減った
・利用者の急な立ち上がりや一人歩きの頻度が減った

・利用者間のトラブルが減った

●職員

・OTが小集団での作業活動を行う事で、フロア利用者の見守りがしやすくなった

・利用者の「できる事」や能力に気づきやすくなった

・OTが不在の時でも利用者への活動の提供を行うようになった

・他職種間でのコミュニケーションのヒントになった

【考察】

施設に入所する事で、これまでと違った環境での生活となってしまい、作業バランスが崩れる事が、不安や精神的に落ち着かない等のBPSDの症状に繋がっていると考える。その中で、個人に合わせた作業活動を提供した事で、活動に集中する利用者が増え、急な立ち上がりや一人歩き、利用者間のトラブルの減少等の職員の業務負担の軽減にも繋がっていると考えられる。また、作業活動を行う事で、利用者の自信回復にも繋がり、他利用者との仲間意識、仲間作りのきっかけとなり、社会参加の一步にも繋がっていると思われる。

また、作業活動をきっかけにコミュニケーションの機会が増え、そこから日々のケアのヒントになっていると考える。

【まとめ】

神経精神医のAdolph Meyerは「仕事、遊び、セルフケア、睡眠のバランスの取れた生活を再構築（習慣化）する過程が健康を維持し、生活に意味をもたらす」と述べているが、入所中の利用者の中にはやるべき作業が出来ない方（作業剥奪）が多くいる印象を受ける。

未だコロナの影響があり、外出の機会が少

ない状況があるが、「できない」よりも「どうすればできるか」という視点で方法を考え、社会参加への取り組みを行っていきたい。また、作業療法＝生活全体と考え、作業療法を通じて、利用者の理解やより良いケアの提供が出来るようになるよう、これからも「いきいきOT大作戦」に取り組んでいきたい。